学科フォーカス No.22

今回の学科は　経済学部 国際経済学科

経済学だけでなく、語学および国際社会の現状に関する知識を深め、諸外国の社会的背景・文化をも知ることができる経済学部国際経済学科から、尾上修悟教授の「演習Ⅰ(16)」と加藤眞理子准教授の「演習Ⅰ(2)」を紹介します。

演習Ⅰ(16) ってどんなゼミ?

大学とは教員と学生が協力して研究を育てる場所。自主性を伸ばす勉強法で、実戦能力を身につける。

社会に出れば、周囲の人と円満に仕事を進めていくための協調性が求められます。仲間同士話し合い、学習する過程で人間関係を構築する力を養ってもらいます。

大学は教育機関であると共に、研究機関であるということ。教員、学生が協力して研究を育てる。

今日、欧州危機という言葉が盛んにメディアに登場していますが、なぜ危機が起きたのか、その実態はいかなるものか、将来的な対策はどうするべきか、ゼミではそれらを多方面から検討します。その際にテキストとして使用するのは、私が書いたものです。学部生には難解な内容ですが、それを使うのは大学は教育機関であると同時に研究機関ですので、教員は今、何を研究していて、どういう成果を出しているのかを学生に伝えたいからです。そして、学生たちの意見も聞き、力を合わせて研究したい。教員も学生も研究者であり、ゼミとは両者が一致団結して研究を育てる場であると位置づけ、それによって、教員と学生がひとつの研究成果を分かち合うということを目指しています。

学生自身が考え討論することで、自主的に学ぶ力を養う。プレゼンで、表現力を磨く。

学生には研究者として自主的に考え、学習してもらうため、教員と学生が双方向に意見を出し合うアクティブラーニングの仕方を取り入れています。3人1組の班で、協力して演習テーマに沿ったレジュメを作り、プレゼンをし、チームで討論しながら共同学習をする。それによって周囲との協調性や自主的な学習力を養い、さらに自分の意見を相手にしっかりと伝える表現力も身につきます。互いに知的な刺激を与え合うことで、ゼミ全体の能力を高めていくこともできるのではないかと思います。

冒険は若者の特権。目標を常に高く持って、世界で活躍できる人材に。

ゼミの伝統として、学生たちには「ファイナンシャル・タイムズ」を読んでもらいます。経済の多面的な理解を深めるための英語力を身につける、といった実践的な狙いもありますが、なによりも「世界」に興味を持ってほしいと考えてのことです。私自身が留学で得たものが多いと感じているからかもしれませんが、学生たちには広く世界に挑戦し、キャリアアップや新たな能力に気づくチャンスをえてほしいのです。

卒業生の中には、海外の大学院でMBAを取得して外国の企業で働いたりと、世界で活躍している先輩がいます。みなさんもゼミをきっかけに、冒険心を持って世界に挑戦し、やがては海外のビジネスや研究の現場で活躍できるグローバルな人材になってくれることを願っています。

尾上 修悟（おのえ しゅうご）教授

一橋大学社会学修士、京都大学博士（経済学）。専門分野は経済史、財政学・金融論、経済政策。主な研究テーマは国際金本位制に関する研究、現代のフランス金融システムに関する研究、欧州経済統合に関する研究など。

演習Ⅰ(2) ってどんなゼミ?

発展途上国の経済成長を学ぶことを通して、社会的な危機感と国際感覚、思考能力を身に着ける。

どんな道でもいい。「自分はこの道で生きていきたい」と決めたときは、全力で頑張れるようになってほしいなと思います。

文化、社会面を含めた多面的な分析によって、問題を抱えた経済の改善方法を考える。

急速な経済成長局面にある発展途上国では、ジェンダー問題や児童労働、宗教問題、カーストなど、様々な要素が複雑に絡んだ社会問題が存在します。このゼミでは、インドやパキスタンを例に、社会に発生している不公平や暴力などの「ゆがみ」を、主に経済面から考察することをテーマとしています。社会問題の原因となっているものは何なのか。また、どうすれば解決できるのか。初歩的な経済発展の評価指標や研究方法の分析を学びながら、自分の頭で考えた、自分なりの意見を出してもらいます。

原書を読むことで、英語力を高めると同時に、テーマを深く理解する。

テーマを理解、研究していくにあたって、英語文献の輪読をおこないます。今年はOxford univ. Pressの“UNDERSTANDING POVERTY”を使用しています。大学では専門的な内容は英語で読む習慣をつけてほしいという意図もありますが、あえて難解な英文に取り組み、苦労しながら意味が通るように翻訳することで、より深く理解できると考えているからです。

また、今後の研究の過程で、「これは不公平だ」、「ここに問題点がある」といった、自分なりの考察の規範的な指針になるよう、入門書でもよいので、アリストテレス、カント、ハーバーマス、ロールズなどの社会思想の流れは触れるように奨めています。

物事の表層ではなく、本質を把握する理解力を育み、考察ができるようになってほしい。

ゼミを通して学生たちには物事の表面的な部分ではなく、根本的な原因を把握できる、大きな視点で捉えられるようになってほしいと思います。発展途上国をテーマにしていますが、社会と経済の構造自体を考えられるようになれば、実は先進国・日本も同じような問題点を抱えているということ、身近なところでも不平等や、貧困の増加が社会問題となっていることが分かるようになります。

構造的に弱い立場の人は経済的負担が増したり、さらには暴力の温床になったり、被害が集中する傾向がある。貧困からくる社会的排除（ソーシャルエクスクルージョン）が発生して貧困が再生産されるという構造は、実は発展途上国に限らない。特に日本の貧困率は先進国最悪水準と深刻です。こうした社会や経済の構造に自分で気がつき、社会的な危機感を持てる、自分の意思で考えられる人になってほしいですね。

加藤 眞理子（かとう まりこ）准教授

東京大学経済学部経済学科卒業、東京大学博士。サセックス大学修士（経済学部）など。主な研究テーマはインドにおける人口移動と所得分配など。